

令和5年度 学校評価報告書 (目標設定・実施結果)

| 視点                | 4年間の目標<br>(令和2年度策定)   | 1年間の目標  | 取組の内容   |   | 校内評価   |   | 学校関係者評価<br>(3月14日実施)  | 総合評価 (3月14日実施)  |  |
|-------------------|---|---|---|---|--|---|---|---|--|
|                   |   |   | 具体的な方策  | 評価の観点   | 達成状況   | 課題・改善方策等  |   | 成果と課題   | 改善方策等  |
| 1<br>教育課程<br>学習指導 | <p>①生徒の海洋科学に対する意欲や探究心を高める教育課程編成や組織的な授業改善に取り組む。</p> <p>②授業や学校行事等を充実させ、生徒の主体的な行動の促進を図る。</p> | <p>①・生徒の「主体的・対話的で深い学び」の実現に向け、探究的な学習や体験的な学びの充実を図るとともに、授業見学、研究授業、校内研究の充実と教員の情報活用能力の育成を図る。</p> <p>・新教育課程の確実な実施に向けた教育内容や指導体制の改善・充実を図る。</p> <p>②水産各分野における地域と連携した研究活動や実習等をおして、生徒の主体的な活動の推進を図る。</p>    | <p>①単元をベースにした指導方法や評価の在り方について、研修会や研究授業を通して職員意識を向上させる。</p> <p>・ICTを活用した指導を推進し、対話的な学びを充実させる。</p> <p>・3観点別評価について成績シートやチェックシートを整備するとともに職員間で運用ができるようにする。</p> <p>②海洋科学プロジェクトを本校の教育活動の中心とするため、職員の意識向上とともに、各段階での教育活動を充実させる</p> | <p>①1・2学年生徒の授業評価において、「授業で身についたりできるようになったことを実感できた。」における肯定的な回答が90%以上となったか。</p> <p>・新教育課程について滞りなく指導する体制ができたか。</p> <p>②マリンマイスターの基礎資格となる「水産海洋技術検定」における合格者が増加したか。</p> | <p>①ICT利活用研修等をおして授業改善を進めた結果、生徒による授業評価において、第1回91.5%、第2回92.6%と指標をクリアすることができた。</p> <p>・3観点別評価のチェックシートを改善し、システムに成績入力ができるよう整備した。</p> <p>②海洋科学プロジェクトにおける意識の向上などにより、1学年において実施した「水産海洋技術検定」において、R4年度の合格率が62%に対し、今年度は61%であった。</p>                            | <p>①各授業において教員によるICT利活用が進むものの、生徒が主体的に端末を活用するまでには至っていない。</p> <p>・今年度の反省を踏まえ、3観点別評価のチェックシートをさらに改善し、引き続き新教育課程の実施に向けての課題の洗い出しや共通認識の形成を図る。</p> <p>②マリンマイスターの基礎資格となることから、各学科積極的に取り組みを行っていたが、生徒の意識が低く、合格率が減少してしまったため、来年度は、生徒の意識向上を目指して授業改善を進めるとともに、不合格者は次年度の受検を勧める。</p> | <p>・ICT利活用研修等による授業改善効果が、生徒による授業評価において指標をクリアされたことは大いに評価することができる。</p> <p>・海洋科学プロジェクトにおける生徒の意識向上に向けた教職員の努力を評価する。</p> <p>・マリンマイスターの合格者が減少したことは残念である。今後も生徒に資格を取得するメリットを理解させることと、授業の合格に向けた重点的な取り組み（基礎を強化するなど）が必要だと考えられる。</p>                        | <p>①・生徒の「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善では、一定の成果が得られた。授業におけるICTの利活用をさらに推進する。</p> <p>・新教育課程に対応した成績処理シートの整備を行った。</p> <p>②海洋科学プロジェクトによる2年度目の教育活動を実践したが、評価の指標とした水産海洋技術検定の合格率は61%となり前年度と同水準に留まる結果となった。</p>  | <p>①・生徒の「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて、授業におけるICTの利活用を一層推進するため、授業改善に引き続き取り組む</p> <p>・新教育課程と学科改編の完成年度として指導体制の改善・充実を図る。</p> <p>②海洋科学プロジェクトについて、一層の周知を図るとともに、生徒の資格取得への意識向上を目指した授業改善を進める。</p>          |
| 2<br>生徒指導・支援      | <p>①生徒一人ひとりの個に応じた支援体制の充実を図る。</p> <p>②部活動の活性化と生徒の主体的な取り組みの充実を図る。</p>                       | <p>①必要な生徒に対して、個々に応じた支援が適切にできるよう教育相談体制を充実させSCやSSW、外部機関との連携を推進する。</p> <p>・生徒のコミュニケーション能力の向上を目指した取組みを充実させる。</p> <p>②・部活動加入率・参加率の向上と水産クラブの充実を図る。</p> <p>・文化祭や体育的行事等の充実を図るとともに、生徒の主体的な関わりを促進させる。</p> | <p>①生徒支援グループと年次・学年の協力体制のもと、支援が必要な生徒に対してSC・SSWや外部機関、ケース会議を活用するなどして適切な支援を行う。</p> <p>・生徒指導の際、コミュニケーションを円滑にはかれるよう指導し、円滑な学校生活を送れるよう支援する。</p> <p>②活動が活性化するように、顧問から積極的な加入・参加を働きかけるとともに、部活動見学や仮入部期間などを見直し、入部しやすい環境を整える。</p>   | <p>①生徒支援グループと年次が連携して、生徒を指導することができたか。また、SC・SSWや外部機関と連携して、生徒を支援することができたか。</p> <p>・生徒間および生徒教員間で円滑にコミュニケーションが取れるようになったか。</p> <p>②部活動加入率が前年度を超えたか。また、活動日数が増加したか。</p> | <p>①生徒支援グループと年次が連携して、生徒を指導することができた。本年から開始したサポートドッグの活用や、必要に応じ、ケース会議・SC・SSWなどと連携し、生徒支援を行った。</p> <p>・生徒間および生徒教員間でのおおむね良好なコミュニケーションが取れた。円滑な学校生活への支援ができた。</p> <p>②部活動の加入率が56%を超え、いずれの部活動も活発な活動が行われた。</p> <p>・文化祭、体育祭を、実行委員会を中心に、生徒を主体として運営することができた。</p> | <p>①学習に困難を抱える生徒が一定数いる。個に応じた対応とともに、生徒全体の底上げを図ることによる支援の方法も検討する必要があると考えられる。</p> <p>・生徒の指導・支援に、学年や生徒支援グループでの指導に加え、学科の視点での指導・支援を充実させる。</p> <p>②部活動の充実に向けて、生徒会費を適正に割り振り、安心安全な部活動運営につなげていく。</p> <p>・来年度より第1回体育祭が挙行される。生徒活動の充実とともに、持続的な行事となるよう計画する。</p>                 | <p>・学習に困難を抱える生徒が孤立することがないように、生徒全体の底上げを図る等、個々の生徒の意識が向上するよう支援体制を評価する。</p> <p>・学校生活支援として今年度から開始したサポートドッグも効果がうかがえる。</p> <p>・一定数いる学習に困難を抱える生徒に対しては、支援方法を今後必要がある。</p> <p>・部活動加入率が増加したことは評価できる。</p> <p>・文化祭、体育祭が実行委員会を中心とした生徒主体での運営ができたことは評価できる。</p> | <p>①生徒支援グループと学年（年次）が連携し、SC・SSWや外部機関を活用しながら生徒の支援を組織的に行うことができた。</p> <p>・学校行事など、生徒が主体的に活動する場面を通じて、コミュニケーション能力の向上に向けた取組を行った。</p> <p>②1年生をはじめ全体の部活動入部率を増加させることができたが、各部の活動状況が継続的に行われるよう支援する必要がある。</p> | <p>①生徒支援グループと学年（年次）及びSCや外部機関と連携しながら、生徒一人ひとりに応じた効果的な支援を行う。</p> <p>・学校行事に生徒が主体的に取り組むことを支援し、生徒のコミュニケーション能力のさらなる向上を目指す。</p> <p>②部活動紹介や声掛け等を積極的に行い、加入率増加に取り組む。また、顧問の複数配置など、適切な支援体制の構築を行う。</p> |

|   | 視点           | 4年間の目標<br>(令和2年度策定)  | 1年間の目標  | 取組の内容   |  | 校内評価  |   | 学校関係者評価<br>(3月14日実施)  | 総合評価(3月14日実施)  |   |
|---|--------------|--|---|---|--|---|---|---|--|---|
|   |              |  |   | 具体的な方策  | 評価の観点  | 達成状況  | 課題・改善方策等  |   | 成果と課題  | 改善方策等   |
| 3 | 進路指導・支援      | ・生徒が自らのキャリア発達を意識できる進路指導の充実を図る。   | ①海洋科学プロジェクトによる3年間を見通した進路指導体制の確立を図る。②全ての専門系列及び学科においてインターンシップや職場見学会などの参加率を向上させ、生徒の適切な勤労観、職業観を育成する。  | ①LHRを活用した進路ガイダンス企画を計画に沿って実施する。<br>②各学科に対して、早い段階でのインターンシップの企画立案と生徒への周知を依頼する。   | ①計画に沿って実施できたか。実施後生徒にアンケートを取り効果を検証する。<br>②各専門系列や学科でインターンシップや職場見学会が計画され、全系列から参加することができたか。                  | ①1年生に『先輩の話聞く』を実施し、卒業後の様子を具体的に聞くことができ自分の進路をイメージすることができた。<br>②全学科で多数のインターンシップが実施され、積極的な参加があった。  | ①講師の選定方法について、どの進路先の方にするか生徒、学科の意向を踏まえて決定していく。<br>②各科において5～8事業所でのインターンシップが実施され延べ53名の参加があった。進路支援Gでは各科における実施状況を集約し今後に繋げる。                           | ・生徒にとって適切な勤労観、職業観が健全に育成され、将来の目標の芽生えにつなげる指導を評価する。<br>・計画に沿って『先輩の話聞く』を実施することができたこと、インターンシップを実施し積極的な参加があったことは大いに評価できる。   | ①進路ガイダンス行事の実施により生徒の進路意識の向上が見られた。<br>②各学科で、インターンシップや職場見学などへの積極的な参加が見られた。今後は各学科の特性に応じて、有効な進路支援事業を考案する。   | ①海洋科学プロジェクト設置3年目となる。円滑な実現に向け各学年(年次)の支援をより充実させる<br>②インターンシップや職場見学をより有効な形で実施できるよう、全職員で取り組む。   |
| 4 | 地域等との協働      | ①教職員一人ひとりが創意工夫し学校の魅力を開発・発信し、海洋学習センター機能を充実・発展させる。<br>②地域との協働を推進し、地域に信頼される学校づくりを進める。 | ①・海洋学習センター機能の充実・発展を図り、本校の教育資源を活用した取り組みを推進する。<br>・学校ホームページを充実させ本校教育活動を積極的に発信する。<br>②地域との協働を推進させるため、産・官・学の連携事業を充実・発展させ、地域から信頼され、必要とされる学校づくりを推進する。 | ①学校の人的・物的資源を活用し、小・中学生や社会人を対象とした出前授業・公開講座を計画する。<br>・新4科それぞれが入学試験での倍率が上昇するようホームページに情報を発信する。<br>②三浦真珠プロジェクトや「ヨコスカ×スマートモビリティ・チャレンジ」等、産・官・学との連携事業を充実させ、県内外に知られる学校づくりを推進する。 | ①出前授業・公開講座等が開催できたか。<br>・中学生が興味を持つような情報を、新4科がホームページで発信できたか。<br>②生徒や職員が産・官・学との連携事業に参加し、その取り組みを発信することができたか。 | ①本年度、出前授業・公開講座の開催はできなかった。海洋シンポジウムなどに生徒が参加することで本校の学びを発信することができた。<br>・ホームページだけでなくSNSによる情報発信も頻度高く行えた。<br>②地域での様々なイベントやボランティアに生徒や教員が積極的に参加し、本校への信頼を築く一助とすることができた。 | ①発信された情報量が多いが、整理がされていない部分があり、見やすく分かりやすいホームページになるよう、再編成する必要がある。<br>・本校の特色ある教育資源を広く発信し、公開講座等の実施に繋げていく。<br>②学校の人的・物的資源を活用した持続的な地域連携とそれを実現する計画を立てる。 | ・インスタグラムの動画は情報発信として効果があった。<br>・ホームページは情報量が多いので、見やすく分かりやすくなるよう、改善すべきだ。<br>・生徒が長井のウォークラリーに運営スタッフとして参加していた。また、無線技術科3年の課題研究では、コロナ対策用パーティーを再利用しクリスマスイルミネーションを製作して、西行政センターに展示するなど、積極的に地域連携を行っており評価する。 | ①学校ホームページは、閲覧者にとって分かりやすい内容に改善を図った。各学科の取組等については、Instagramも用いて積極的に情報発信することができた。<br>②三浦真珠プロジェクトをはじめ、各学科がその特性に応じた連携・協働事業を実施することができた。さらに積極的に情報発信をする必要がある。 | ①本校の教育活動について、地域等からの一層の理解を図るため、引き続きホームページやInstagramを活用した積極的かつタイムリーな情報発信を行う。<br>②各学科をはじめ、部活動や水産クラブ等においても、その特性に応じた連携・協働事業が実施できるよう検討する。 |
| 5 | 学校管理<br>学校運営 | ①全ての教職員が教育環境の変化に迅速に対応し、前向きに課題に取り組む学校文化を形成する。<br>②教職員の働き方改革を推進するための意識改革を図る。         | ①学科運営のあり方等、新校の完成年度も視野に入れた諸課題の解決に全教職員で取り組む。<br>②業務の精選や業務分担の適正化をとおして、教職員の働き方に対する意識の向上を図る。   | ①海洋科学プロジェクトの内容を全職員が一丸となって取り組む。<br>②業務の見直しと職員の役割分担の適正化をすすめ、ノー残業デーを導入することで職員の働き方に関する意識改革を図る。  | ①海洋科学プロジェクトに基づいた実践ができたか。<br>②ノー残業デーの実施により、時間外勤務の削減ができたか。   | ①海洋科学プロジェクトの成果の一つである資格取得において、職員室前掲示板等を整備するとともに、各学科職員の意識が向上した。<br>②グループ編成の変更により業務分担が改善した。ノー残業デーについては声掛けにより一定の効果があった。   | ①各学科の学びを踏まえて、資格試験や体験学習の内容を見直すとともに、3年間の学びを示すものとして日々の授業等で意識する。<br>②時間外勤務については大幅な削減には至らなかった。個々の職員の意識改革を推進する方策を考案する必要がある。                           | ・海洋科学プロジェクトにおける資格取得の掲示板を整備し周知を共有を図ることは評価できる。<br>・職員の意識の向上については、アンケート実施結果などの指標が示されるべきだ。<br>・グループ編成の変更やノー残業デーの実施により一定の効果があったことは評価できる。   | ①海洋科学プロジェクトの取組については、職員間での共有を図り、一定の意識向上は見られた。<br>②年間を通じた衛生委員会での協議など、働き方の意識改革は進んだ。今後も定期的なノー残業デーの実施や業務の見直しと職員の役割分担の適正化を検討する必要がある。                       | ①学科改編の完成年度として、海洋科学プロジェクトを検証し、職員間の一層の周知と取組の徹底を進める。<br>②定期的なノー残業デーの設定など、職員の働き方改革の意識向上に向けた取組を推進するとともに、業務の見直しと職員の役割分担の適正化については検討を継続する。  |